

## 発表（１）ヨーロッパヒラガキ養殖の海外視察調査報告

寺本 沙也加（水産技術センター増養殖部）

### 【はじめに】

ヨーロッパヒラガキは、令和6年度に国内定着が確認された欧州原産の食用カキであり、本県では令和7年度より重点研究課題に位置付けられた新規養殖種である。本種の種苗生産・養殖技術を早期確立するため、令和7年10月24日～11月1日の期間、本県がモデルとする産業化のスタイルを有する北欧スウェーデンを視察調査した。フランス等の主要生産国では、疾病の蔓延により減産が顕著であるほか、広大な干潟を利用したバスケット養殖が主流であるため、本県漁場へ応用しにくい側面がある。一方、スウェーデンを含む北欧は、低水温環境により疾病が発生しておらず、近年生産量を伸ばしている。加えて、同国西海岸では、水深のあるフィヨルド地形を利用した垂下養殖が行われており、リアス式海岸を有する本県と漁場環境が類似している。なお、同国のヨーロッパヒラガキは、大量生産・大量消費型の産業スタイルではなく、希少性と品質を売りにした高級食材としての地位を確立している。

以上のことから、種苗生産・養殖技術および市場戦略の観点において、本県が目指すべき生産モデルは北欧型であると考え、現地で種苗生産から養殖方法、流通状況までを調査したので報告する。

### 【視察で得られた知見】

スウェーデン唯一の種苗生産施設を有し、種苗生産から養殖までの一貫生産を実施している先進企業である Ostrea Aquaculture 社（スウェーデン・コスター諸島）を視察した。同社における取組から以下の知見を得るとともに、国内10か所以上の魚市場や鮮魚店を調査し、各販売拠点における価格、流通形態、消費者への提供スタイルを調べた。

#### (1) 種苗生産

飼育水は、水深40m及び90mから取水し、UV-0殺菌を廃止して、バイオフィルターによる細菌叢制御（生態学的濾過）へ転換することにより、幼生生存率を従来の2～10%から10～80%に向上させている。幼生飼育時は、全換水率100%/h以上の高流量循環により細菌増殖を抑制することで、180L水槽で約200万個体の高密度管理を行っている。餌料培養は、Industrial Plankton社（カナダ）の自動培養装置を2台と、独自開発した培養バックを使用して生産している。餌料藻類は、*Rhodomonas salina*（80%）と *Tetraselmis suecica*（20%）を混合して給餌しており、100万個の幼生飼育に対し、300～400細胞/ $\mu$ lの餌料が1,000L/日必要となる。

#### (2) 養殖方法

陸上で殻高5mmまで育成した後に沖出しを行い、20mmまでは多段式ランタンネッ

ト、それ以降は多段式バスケット（カナダ製）へ移行して育成する。低水温環境のため、出荷サイズの殻高 70mm、殻付き重量 80g へ育成するまでの養殖期間は3～5年を要する。なお、生残率を高めるために、定期的な分散と低密度飼育が必要である。

### (3) 流通状況

ストックホルム、イエーテボリ、ウッデバラ、タヌム、グレッベスタード、ストレムスタードにおいて、魚市場や鮮魚店を調査した。スウェーデン産ヨーロッパヒラガキの現地価格は、PDO 認定（EU の品質認証制度）を受けているグレッベスタード産が1個あたり約1,500円、他の地域産が1個あたり約1,200円と、マガキの2倍以上の高値で取引されており、フランスなど他の欧州産と比較しても高価であった。これは、北欧の低水温環境での長期育成により優れた風味や品質が形成されることから、欧州市場において最高級品としての地位を確立していると考えられる。流通形態は殻付きの生食用であり、規格は殻高 70mm、殻付き重量 80g で統一されていた。提供スタイルは、店頭でアルコールと共に提供するハーフシェル形式が主流であった。一般量販店には卸さず高級市場のみに販路を限定することで、「わざわざ現地に赴いて食べる特別な食材」としての付加価値を高めていた。

### 【今後の展開】

ヨーロッパヒラガキは、主要な貝類養殖種の不調が続く本県養殖業において、既存種を補完・代替する新たな選択肢になり得ると考えられる。本種は、卵巣肥大症への感受性がなく、8月末～2月頃にかけて旬を迎えるため、マガキの端境期を補完することが可能である。これにより、カキ類の周年出荷が可能となり、漁家収入の向上が期待される。また、山田湾での養殖試験や呈味成分分析の結果から、県産個体は欧州産と遜色ない品質を有し、原産地より短期間で生産できる可能性が示唆されている。今後は、今回の視察で得られた知見を基に、種苗生産や養殖技術の確立、および種苗の安定供給体制の構築を図ることで、収益性の高い持続可能な養殖モデルを確立し、産業化への移行を推進していく。



図 スウェーデン視察の様子